4.1±1.5, p = 0.044)、セミナー前後で自尊感情が高くなったことが示された。LOC尺度では、中間評価での得点が有意に高く(46.2±7.5vs.50.8±7.5, p <0.001)、セミナー開始時よりも修了時において Internal 傾向が強くなったことが示された。GDS 得点は、中間評価での得点が有意に低く(2.8±2.5 vs. 2.3±2.6, p = 0.033)、セミナー前後で抑うつ度が減少したことが示された。

自己効力感尺度では、セミナー前後で有意な得点の変化はみられなかった(20.6±2.8vs.20.8±2.6, p = 0.551)。また、A型傾向判別表得点においても、ベースライン健診と中間評価の得点の間に有意差はみられなかった(9.1±3.8 vs. 9.8±4.1, p = 0.139)。

D. 考察

5 つの心理尺度のうち、自己効力感とA型傾向ではセミナー前後での得点の変化はみられなかった。一方、自尊感情、GDS、LOC においてセミナー前後での得点の変化がみられた。この結果より、セミナーへの参加による心理的な介入効果が示唆された。

ボランティア活動を実際に開始する前であっても、自尊心が高まるのではないかという本調査の仮説は支持されたといえる。本調査で使用した自尊心尺度を作成したローゼンバーグ(1965) は、他者との比較においてではなく、自己が自分自身に対して「very good (とても良い) 」と感じる面と「good enough (これでよい) 」と感じる面のうち、「good enough (これでよい) 」と感じる度合いが高いほど自尊感情が高いと考え、自尊心尺度を作成した [13]。したがって、セミナーに参加したことにより、受講者が自己に対し、「これでよい」と自己評価する傾向が高まった結果、セミナー修了後に自尊心得点が高まったといえよう。

ボランティア養成セミナーにおいて、3つもの心理尺度において得点の変化がみられた結果には、本研究で実施したセミナーの特徴が関与していると考えられる。

以下に、セミナーの特徴 2 点を挙げる。

一つは、本ボランティア養成セミナーにおいて、受動的な講義の他に、能動的な参加を要するグループディスカッションを採用し、さらにディスカッションの結果を相互に報告する時間も設けた点が挙げられる。従来の高齢者の社会参加とは「閉じこもり予防」→「地域の茶の間的サロン」というステレオタイプで語られることが少なくない。後者ではコミュニケーションの話題の中心は「日常のよもやま話」で終わることが多い。一方、本セミナーにおけるコミュニケーションは「読み聞かせの技術向上・望ましいボ

ランティア活動を始めるため」という明確な目的を持っている。膨大な数に上る、絵本を選定し、読みこなすには、講師をはじめ仲間同士の情報交換が必須であり、絵本を介した話題に事欠くことはない。また、常にグループ内外でのディスカッションに対応できるようにするには、セミナー時以外での自習（自宅での予復習や図書館・書店通いなどの知的能動活動）を要する。また、セミナー後半ではボランティア実践活動(デビュー)に向けて、自習のみならず、グループでの自主的学習、練習時間会が行われた。これらの活動すべてがまさに「生涯学習」であり、それを継続しえたことに対する満足感や達成感が自尊心得点の改善に作用した可能性が示唆された。

もう一つは、セミナーにおけるプログラムの順序が功を奏したと考えられる。第 1 段階で講義型のプログラムを連続しておこなうことで「場」や「雰囲気」に慣れ、引き続き、第 2～3 段階でグループディスカッションやグループ報告・発表を設定した。こうした順序でセミナーを進めることで、受講者の緊張が軽減し、スムーズに仲間意識が芽生え易くなったものと思われる。

E. 結論

ボランティア養成セミナー受講の前後で自尊心、LOC における内的傾向、抑うつ度の改善が見られた。知的能動性が喚起されるとともに生涯学習への自信や達成感が生じ、親和の欲求、自我・自尊の欲求、自己実現の欲求がより一層満たされる環境に身を置いたことが得点の変化の一要因であったと考えられる。

[引用・参考文献]

1) Omoto A, Snyder M, Martino SC. Volunteerism and the life course: investigating age-related agendas for action. Basic Appl Soc Psychol, 2000, 22, 181-197.

2) Thoits PA, Hewitt LN. Volunteer work and well-being. J Health Soc Behav, 2001, 42, 115-131.

3) Fischer LR, Schaffer KB. Older volunteers: A guide to research and practice. Newbury Park, CA: Sage Publications, 1993.

4) Moen P, Dempster-McClain, D, Williams, RM, Jr. Successful aging: A life course perspective on women's multiple roles and health. Am J Soc, 1992, 97, 1612-1638.

5) Musick MA, Herzog R, House JS. Volunteering and mortality among older adults: findings from a national sample. J Gerontol, 1999, 54B, S173-S180.

6) Wheeler JA, Gorey KM, Greenblatt B. The beneficial effects of volunteering for older volunteers and the people they serve: a meta-analysis. Int J Aging Human Development, 1998, 47, 69-79.
7) Luoh MC, Hezog AR. Individual consequences of Volunteer and paid work in old age: health and mortality. J Health Soc Behav, 2002, 43, 490-509.
8) Musick MA, Wilson J. Volunteering and depression: the role of psychological and social resources in different age groups. Soc Sci Med 2003; 56: 259-269.
9) Lin NYX, Ensel W. Social support and depressed mood: A structural analysis. J Health Social Behv, 1999, 40, 344-359.
10) 末永俊郎. 社会心理学入門. 東京大学出版会, 1987, 211-214.
11) Sherer, M., Maddux, J.E., Mercandante, B., Printice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R.W. The self-efficacy scale: Construction and validation. Psychilogical Reports, 51, 663-671.
12) 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治. Locus of Control 尺度の作成と、信頼性、妥当性の検討 教育心理学研究, 1982, 30(4), 38－43.
13) Rosenberg, M. Society and the adolescent self-image. Prinston Univ. Press, 1965.

F.研究発表

1．論文発表　　なし

2．学会発表

西真理子，藤原佳典，渡辺直紀，他．都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”—2．ボランティア養成セミナーの効果—．日本老年社会科学会第47回大会，東京，2005．6．15-17（発表予定）．

G. 知的所有権の取得状況　　なし

[研究協力者]

渡辺直紀，西真理子，吉田裕人，井上かず子，大場宏美，天野秀紀，熊谷修．（東京都老人総合研究所・地域保健研究ｸﾞﾙｰﾌﾟ）

新井克巳/尾崎俶美/渡辺明彦（中央区社会教育課）

山崎翠（和光大学・なかよし文庫［家庭文庫］主宰）

植田たい子（日本橋図書館）

武田順子/富澤美奈子/峰由貴/越山晴夫（川崎市多摩区役所保健福祉ｾﾝﾀｰ）

熊谷裕紀子（川崎市学校教育ボランティア・コーディネーター）

明石圭子/松山悦子/馬場富幸/清水厚子（長浜市保健センター）

河合正博（長浜市立図書館）

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）
分担研究報告書

都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS”
― 4. KJ法による活動の質的評価 ―

分担研究者　西川　武志　　北海道教育大学教育学部医科学看護学部門助教授

「REPRINTS」の基本コンセプトは高齢者の社会貢献、グループ活動、生涯学習を通じ、「社会的役割」と「知的能動性」を維持しようとするものである。「REPRINTS」ボランティア（中央区27名、川崎市多摩区12名）を対象に、これらのねらいが9ヶ月間の活動を通して達成しえたかどうかをKJ法を用いてボランティア自身が語る言葉により質的に評価した。「絵本の世界への探求」「友人、地域とのつながり」「子供とのふれあい」が上位を占めた。ボランティアの感想の質的評価から「REPRINTS」により「社会的役割」と「知的能動性」が維持・向上できる可能性が示唆された。一方では、グループ活動の運営には課題が多く、高齢者間のネガティブサポートに留意し活動を推進・評価する必要があろう。

A. 研究目的

「REPRINTS」の基本コンセプトは高齢者の社会貢献、グループ活動、生涯学習を通じ、「社会的役割」と「知的能動性」を維持しようとするものである。これらのねらいが9ヶ月間の活動を通して達成しえたかどうかをボランティア自身が語る言葉により質的に評価することを目的としている。

B. 研究方法

研究１．川崎市多摩区ボランティア・グループにおける質的評価

川崎市多摩区在住の「REPRINTS」ボランティア(平成17年1月末時点、活動を継続中の18名)のうち、2月・定例ミーティングに出席した12名（男性3名、女性9名、平均年齢64.5歳）に対し、9ヶ月間（ボランティア養成セミナー3ヶ月＋読み聞かせボランティア実践活動6ヶ月）の活動を振り返る意見交換の場を設けた。

各ボランティアからの感想はＫＪ法を参考にした方法により集約・分析をおこなった。その方法は、部屋の前方に主題と副題を書いた模造紙を貼り、ボランティアの座っている各テーブルには記入用の名刺大の紙片を配った。

ボランティアに提示した主題は「本ボランティア活動にかかわって変化したこと」であるが、ボランティアが記述しやすいように、この主題をさらに具体的に、ボランティア活動により1）気づいたこと、2）伸びたこと、3）楽しかったこと、

4）その他、の4副題に大別し、それらについて自由に記述させた。

ボランティア自身が記述した紙片をそれぞれ最も関連があると思った副題の下へ貼付けた後、進行役スタッフが紙片の内容によりさらに紙片群を再編した。

研究２．東京都中央区ボランティア・グループにおける質的評価

東京都中央区在住の「REPRINTS」ボランティア(平成17年1月末時点、活動を継続中の30名)のうち、3月定例ミーティングに出席した27名（男性1名、女性26名、平均年齢70.0歳）に対し、多摩区で行なった方法とほぼ同様におこなったが、今回は多摩区での反省を踏まえ、不満や問題点などネガティブな内容も記述しやすいよう口頭で説明した。

《倫理面への配慮》

対象者に対してはすでにベースライン健診実施前に、事業の説明を行い、事前送付した同意書に、署名による同意を得ており、当該研究への協力については既に同意を得ている。また、紙片に記入する自由意見はすべて無記名であり、途中、棄権の自由が保障されることを確認して実施した。

図1　川崎市多摩区の定例ミーティング風景

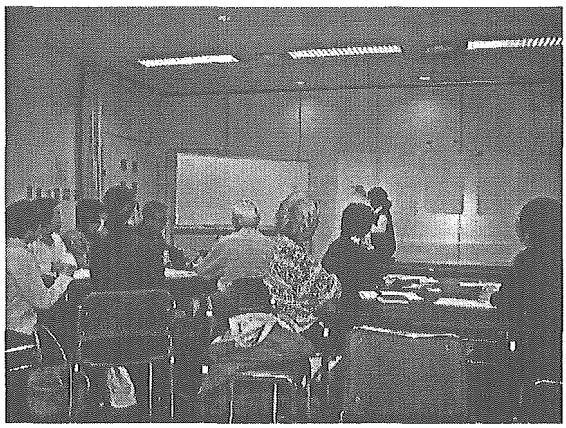


図2　川崎市多摩区でのＫＪ法による「REPRINTS」活動に対する感想の集約風景

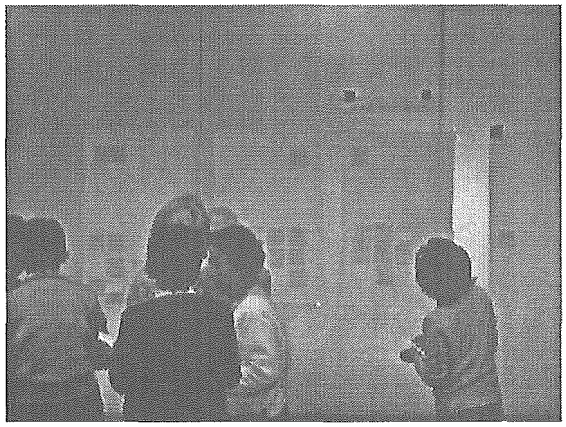
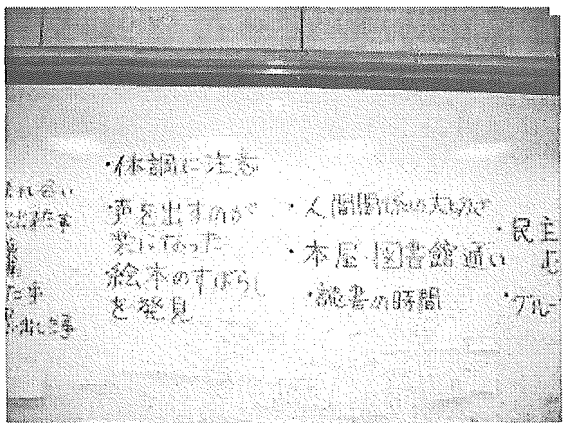


図3　東京都中央区での感想記入紙片の集約風景



C.結果

【結果１．川崎市多摩区での意見集約】

川崎市多摩区では、4副題について記入された紙片は、計68枚であった。紙片の内容を検討して再分類を行なった結果、まず以下の7項目にまとめられた。①「健康」②「家族」③「絵本」④「友人・地域とのつながり」⑤「人前に出る自信」⑥「子どもとのふれあい」⑦「自分たちの子供時代の回想」であった。

項目別の紙片の枚数は、③「絵本」についての紙片が最も多かった（21枚）。たとえば、“絵に見とれてしまう”、“絵本の世界に引き込まれそう”、“言葉のきれいさを改めて感じた”、“絵本の持つ力を改めて感じた”、“絵本を読

んだり選んだり実に楽しい”、“絵本が好きになった”、“沢山の絵本に出会えるのが楽しい”など。さらに、“絵本は大人になっても面白い”、“大人たちにも絵本を読む必要がある”、“絵本の値段の高さにびっくり”という意見もあった。また、絵本選びについては、“絵本選びのために子どもの反応をもっと勉強したい”、“いつも子どもの喜ぶ本は？と頭の中で考えている”、“本屋さんに入ると、まず絵本コーナーに行くのが楽しみになった”などであった。

次に、④「友人・地域とのつながり」が13枚であった。その内容は、“学校に通っているようでうれしい”、“先生が身近に感じられる”など。“外に出かけるチャンスが増え、チョッピリおしゃれをするようになった”、“外に出るのが億劫でなくなった”、“小さなことから社会とつながることの喜びを感じている”など。

また、“友人・仲間が増えた”、“会合などで見知らぬ人と気さくに話ができるようになった”、“知らない人と友人になれた”、“新しい友人・いい出会いができて幸せ”、“ いろいろな世代で構成される環境に入れて良かった”などがあり、それを裏付けるかのように、“大勢の前で何かを行なうことが苦にならなくなった”、“積極的に前に出られるようになった”、“人前で声を出すのが苦しくなくなった”、“大きな声で話ができるようになった”、“声を出すことの大切さを知った”といった⑤の「人前に出る自信」(12枚)について書かれたものが多かった。

さらに、周囲との関わりという点で類似する⑥の「子どもとのふれあい」（10枚）についてみてみると、“子供が近づいて来てくれてうれしい”、“子供たちが声をかけてくれるのがうれしい”、“小さい子供とのふれあいが楽しい”、“子供との会話ができてうれしい”、“子供たちによく声をかけるようになった”、“子供が目を輝かせ真剣に聴いてくれてうれしい”などがある。これら④、⑤、⑥の項目をまとめると、紙片の枚数は計35枚になり、全体の半数を超えた。

枚数としては多くなかったが、①の「健康」(4枚)と②の「家族」(5枚)も重要である。たとえば、“体調に気遣うようになった”、“生活時間にけじめをつける”や、“夫や娘に読み聞かせをして楽しい時間を過ごすようになった”、“姉妹の孫たちに読み聞かせする時間がもてるようになった”などもあった。

【結果２－東京都中央区での意見集約】

東京都中央区でおこなわれた定例ミーティングでの結果をみていくことにする。東京都中央区で記入された紙片は、計74枚であった。紙片の内容を検討した結果、川崎市多摩区と同様に紙片の数が最も多かったのは、②の「絵本」（24枚）である。①「健康」②「絵本」③「地域・友人とのつながり」④「子どもとのふれあい」⑤「自分たちの子ども時代の回想」については、多摩区と同じカテゴリーになったが、⑥「グループ活動」⑦「子どもおよび高齢者への配慮」⑧「グループ運営の課題」は、多摩区ではみられなかった項目であり、想像していた通り問題点として浮かび上がってきたものである。また、⑨「高齢者による高齢者への読み聞かせボランティア活動の要望」は予想していなかった内容であった。

では、紙片の数が最も多かった②「絵本」の内容をみてみよう。“絵本の中から時おり磨きぬかれた美しい言葉を発見し感動することがある”、“絵本のすばらしさにきづいた”、“絵、文ともに美しさとさりげなくこめられた様々な教訓に感動させられた”、“・・自分自身が絵本に興味を持ち、子どもと絵本のかか

わりの大切さがわかった”など、多摩区とほぼ同様であった。

絵本選びに関する内容は、”絵本を調べたり読んだりする時間が多くなった”、“本屋さんに行く回数が多くなった”、“図書館に行く回数が今までの倍に増えた”、“本を探すのが楽しみ”、“図書館で本を選ぶことが多くなった”、“子どもを育てていませんので、今まで絵本にはまるで縁がありませんでしたが、この会に入って絵本を沢山読むようになり、年齢に合ったものを選ぶのが大変なことを知りました”、“今までは自分の世代の本だけだったのが、子どもの本を多く読むことで読書の世界が2倍に広がってきた”などである。

多摩区ではみられなかったが、絵本の読み方に関する内容も多かった。“話をする、おしゃべりをする、読むということの違いがよくわかってきました”、“読み込んで、発表が大事”、“声を出して本を読むことも良いが、ア・イ・ウ・エ・オの発声することが自分では良いように思う”、“少しずつ余裕が出てきて、読むポイントが前より解かるようになったこと”、“回を追うごとに読む時間の配分が良くなったこと”などである。

③「地域・友人とのつながり」と④「子どもとのふれあい」に関しては、多摩区と重なる記述が多かったが、活動している施設の先生に自分たちの努力が認められてうれしかったという感想もあった。“・・（幼稚園の）先生からも向上が見受けられたとうれしいお話を頂いた”、“・・(小学校)の先生からゆったり読んでくれて良かったと言われ、私は私の調子で良いのだと思いうれしかったです”などである。

一方、子どもたちからは次のような反応があった。“○○幼稚園の園児たちの人なつこさと楽しみにしてくれている事、お礼の歌を歌って下さってうれしかった”、“今度いつ？と声をかけてくれる”、“子どもに顔を覚えてもらい声をかけてくれること”などである。

⑨の「高齢者による高齢者への読み聞かせボランティア活動の要望」の内容は、“新しい期に、お年寄り向けのクラスは作っていただけないでしょうか。高齢化して淋しい思いをしている方も多くなり（なったと）最近強く感じておりますので・・”というものであった。

D. 考察

【考察1－川崎市多摩区での意見の集約から】

最も多かった③の「絵本」に関する記述からうかがえるのは、“絵本”をとおして、絵や文章から得られる感動や喜びである。豊かな感受性を持ち続けるという心理的効果が期待できるといえよう。また、高齢になっても絵本を楽しむことができるという発見は、絵本の価値を再認識することになった。絵本選びに関しては、絵本についての学習、クライアントである子供の心理を理解しようと努力する姿勢がうかがわれた。子供にとって望ましい絵本を探求し書店や図書館に頻繁に通うことが、ボランティアにとっての新たな日常活動の一つとして加わったのである。生涯学習による『知的能動性の高まり』と集約できる[6-8]。

次に、④の「友人・地域とのつながり」の記述からは、本来高齢者にとって疎遠になっているはずの小学校とのつながりをもてたことに対する喜びが感じられる。外出が楽しみになり、さらに広い社会とのつながりを持ちたいという意識がうかがえる。

また、新しい友人作りや見知らぬ人との積極的な交流が増えた背景として、⑤の「人前に出る自信」があげられる。そのきっかけとなったのが、「声が大きく

なった」ことというのは注目に値する。これは、養成セミナーをはじめ、グループ内練習や個人の日常的な発声練習による成果と考えられる。

⑥の「子どもとのふれあい」に関する内容は、毎回読み聞かせ活動のたびに聞かれる言葉でもある。日常生活において、子どもとふれあう機会のなくなった高齢者にとって、直に子どもたちと会話をしたり、自分に声をかけてくれたりするふれあいの喜びだけでなく、自己の存在を認めてもらっているという“自尊心”につながるかもしれない。これらの3項目は総じて高齢者の世代間交流を含む『社会活動性の活性化』と集約できる。

①の「健康」と②の「家族」の項目からは、活動に参加することが、自分自身の健康の維持につながることも期待できる[2),3)]。また、読み聞かせ活動が家族との新しい関係を構築していることもわかった。

以上みてきた多摩区におけるボランティアの感想は、全体的にポジティブで明るい内容が多かった。その理由は、まず主題が「変化したこと」であり、さらにボランティアが記述しやすいように「伸びたこと」、「楽しかったこと」といった具体的な項目を与えたために、操作的あるいは誘導的になってしまったのではないかと考えられる。

【考察２－東京都中央区での意見の集約から】

やはり中央区でも、絵本のすばらしさに感動したり、絵本の良さを認識することで、知的な感性が磨かれていく喜びが感じとれる。また、絵本選びに関しても多摩区同様に、ボランティアの大変な様子がうかがえるが、記入された紙片からはむしろ喜びが伝わってくるようである。より良い絵本を探求し書店や図書館に頻繁に通うことや、読むスキル向上のための練習が、ボランティアにとっての新たな日常活動の一つとして加わったことで、生涯学習による『知的能動性』がみられるといえよう。読み聞かせの後に、施設の先生方から誉められ素直に喜ぶ様子からは、他人に認められ社会に貢献できたという達成感が感じられる。活動をとおして得られる自己効力感や自尊心を高めることで、日常生活におけるさまざまな機能を維持するという効果を期待できるかもしれない[4,5)]。子どもたちからの言葉や行動からもボランティアたちに同じような効果がもたらされているようだ。

また、多摩区同様、「声」を出すことに抵抗感がなくなったことが他人との交流の輪を広げ、友人や地域とのつながりに効果的だったことがわかった。また、子どもたちとの関わりが活動場所以外でもみられるようになったことがうかがえた。『社会活動性の活性化』といえる。

⑨の「高齢者による高齢者への読み聞かせボランティア活動の要望」の主旨は、現在自分たちがおこなっている読み聞かせの活動をモデル化し、一般化して、広く社会に役立てようという将来性を感じさせる。一歩進んだ社会貢献につながるかもしれない。

【考察３－グループ活動を継続する上での問題点と解決に向けて】

東京都中央区で集約した感想の中で、川崎市多摩区との違いが際立っていたのは、⑦「子どもおよび高齢者への配慮」と、⑧「グループ運営の課題」という問題点である。ここからは、その問題となった原因を明らかにし第二次のボランティア活動に活かすための解決策を述べることにする。

まず、⑦の内容は、“大型絵本の購入や貸し出しについて、もう少しわかるようにしてほしい。プリントなどで”、“担任が不在の時、事故があったら？遅刻してきた子の面倒見は？今日の風潮で

ちょっと不安になりました”という2点であった。１つめについては、ふだん図書館になじみのない高齢者に対して十分な配慮に欠けていたことがわかり、二期生のボランティアには図書館利用の説明のための時間を設けることにした。二つめの受入れ施設における予期しない事故についての心配は、昨今の事件などで喚起されたものであろう。朝のわずかな時間ではあるが、クラスの担任が不在の時に何かが起こった場合の対処については、受入れ施設の関係者と話合いをもちボランティアに伝える必要がある。

次に、⑧の「グループ運営の課題」についての内容は以下である。“民主的に運営することのむずかしさ”、“前職業等は重くみず、みんなが平等の立場で話せるようにしたい”、“読む番がなかなかこない”、“読む回数のアンバランス”、“（○○小での活動は）他の施設と同様に地元のグループが単独で担当したほうがいいのか、中央区のREPRINTSボランティア全体でシフトを組んだ方がいいのか。そのあたりが不安定に感じる”これらの意見は、グループ活動を運営するうえでの問題点を示唆している。

今までに実際に起きたトラブルを例にあげて、その原因と解決策を検討することとした。

事例1

本例は、読み聞かせボランティア活動のデビュー後間もない頃に起きた、グループ内およびグループ間のトラブルである。

＜経緯＞

ボランティア２７名は全員、ボランティア養成セミナー後半に概ね居住地区により３つのグループに分かれて活動を開始した。原則として、読み聞かせのための訪問施設はグループごとに担当した。ただし、希望者にはできる限り、活動の機会が提供されるように、担当外の施設での活動も奨励することとした。その際、希望者がいる場合には、グループ・リーダー間で派遣の依頼・承諾の連絡を行なうルールを当研究班「REPRINTS」事務局が提案した（プロダクション制と呼ぶ、図４）。Ｘさんは、所属するグループ（Aグループ）と活動場所を決定した後に、個人の自由意志により活動場所（B幼稚園）の追加を要請した。これらの行為はプロダクション制に準じる行為であり、当研究班「REPRINTS」事務局も承知していたが、本来B幼稚園を担当するグループ（Cグループ）のメンバーに前もって連絡がとられていなかった状況で、突然参加して読み聞かせをおこなったため、Cグループのメンバーとの間に軋轢が生じた。ところが、問題はそれにとどまらず、元のAグループにおいてもBグループにおいても誤解が生じ、疎外される状態になり、結局A、C両グループともに所属できなくなってしまった。

＜原因＞

Cグループと合同で、B幼稚園での活動を開始した際に、改めて「あいさつ」「自己紹介」が不十分であったことなど、Ｘさんの言動にやや誤解を生む側面があった点も否定できないが、プロダクション制の基準やルールが明確でなかったために起きたことも一因であったと考えられる。また二次的に、グループ内およびグループ間でのコミュニケーション不足があったため、グループメンバーたちに誤解と混乱を生じさせる原因となった。

＜解決策＞

１．グループ・ワークのあり方の再確認

グループ分け以前にボランティア全員の親睦会を行うことにより、個人個人に各グループの一員であると同時にまず、「REPRINTS」中央区30人全員が一つの

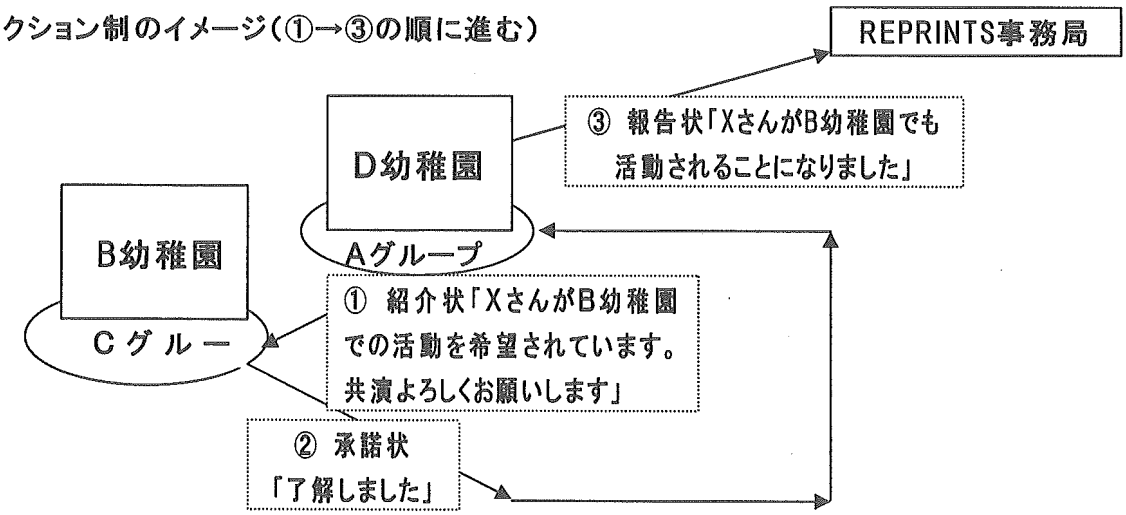
仲間であるという意識を持つようセミナーの運営時には配慮すべきである。何か問題が起きた場合には、グループ全員で話し合いをして解決するといった自主性を養うために、次年度募集予定の第二期生向けセミナーではグループワークの専門家による講義も予定している。

2．グループ・ワークの自律性の見極め

グループ分けの基準を人数・住居地・施設の規模のいずれにするか、あるいはこれらを勘案しゆるやかに調整するべきか、ボランティア養成セミナーのどの時点で話題提起するのが望ましいかは、いまだ議論の分かれるところである。またグループ決定後、不都合がある者はグループ・リーダーを通して変更の検討をおこなうことにする。

一方、グループの自主・自律を望む際に、グループごとに親密度やまとまりには格差があることも実感された。セミナー中期までボランティア間のプライバシーに関する信頼感の欠如と事務局への依存から自主的な電話連絡網の作成にも時間を要するグループもあり、ボランティア活動開始後の円滑なグループ活動が危惧された。

図4. プロダクション制のイメージ（①→③の順に進む）



ボランティア活動を行なう上で、クライアント（学校）への迅速な連絡体制は不可欠である。今後、第二期生のセミナーにおいてはその初頭に最低限の対外的およびグループ間/内のルールを共通認識すべきであるということ

が痛感され、高齢者の社会参加のあり方を考えなおす重要性が示唆された。

事例2

本例は、受入れ施設におけるグループ間の活動配分に関するものである。

＜経緯＞

E施設での活動をFグループのメンバーのうち有志数名だけで内密に行われており、他のメンバーたちには敢えて知らせないまま活動することになった。本事例について、「REPRINTS」事務局は、グループ活動の一環として他のメンバーたちに報告し・希望者には開放する方が良いとの立場をとり続けたが、実際には、同有志数名からの要望にこたえ、他のメンバーにこの活動について尋ねられた場合は「練習のため」と説明することにしている。

＜原因＞

この活動が閉鎖的な活動になっているのは、協調性に欠けるGさんとは一緒に活動したくないし、Fグループの中でも特に気の合う有志数名だけで活動できる施設を追加したい理由からである。

本事例では、「REPRINTS」事務局が紹介した活動施設であるため、事務局としては閉鎖的な行動に賛同できないが、同有志の希望も無視できない。また、その内密の活動が露呈した際にはボランティア間でのトラブルやひいてはそれを黙認していた事務局に対する不信感も生じる危険性がある。

＜解決策＞

「REPRINTS」に参加しているボランティアの活動は、あくまでグループ単位を原則と考えるのであれば、今回のような活動は「ルール違反」であろう。今後、個人で交渉した活動場所であっても他のボランティアに積極的に開放する事例を経験することが重要と考え、今後は活動施設の開拓においても積極的にボランティアの協力を促している。また、本例では期限を限定して自分たちのスキルアップのための「練習・リハーサル」の場とみなして非公式的な訪問活動と位置づけた。今後、ボランティア自らが自主的な新規の施設において読み聞かせボランティアを始める可能性もあろう。クライアント側の混乱を避けるためにもケースバイケースで「REPRINTS」としての活動と非公式的な活動を区別する必要があり、事前にルールをつくることも必要と考えられる。

事例3

＜経緯＞

Wさんが、「REPRINTS」に登録されていない（セミナー未受講）友人を

連れてきて、途中からボランティア活動に参加させようとした。

＜原因＞

Wさんはセミナーや実地研修に欠席することが多く、本プロジェクトに参加するうえでのルールをきちんと理解していなかった。

＜解決策＞

活動に参加する同意をした時点で、本プロジェクトを円滑に運営していくためのルールを説明したが、セミナーの途中でも、常に共通認識をもつことが必要である。そのために、第二期生ボランティアからは、活動参加資格となる最低限のセミナー受講回数を設定することにした。

以上の３例以外にも、大なり小なり、グループ活動の運営上のトラブルや問題は多々見られ、事務局、ボランティアともに課題は多い。これまで、高齢期の社会参加はポジティブな側面のみが強調される傾向にあったが、本来、「社会」とは高齢者のみに優遇されるべきものではなく、また、高齢者だから社会や人づき合いの常識を常に備えているとは限らない。ボランティアを志願する高齢者は地域福祉や、地域連携に対し比較的、見識があるものと考えられるが、それでもこうした問題が生じるのである。一般の高齢者においても「あいさつ」「気づかい」「ルール」といった社会参加の原則を確認しあうことが重要であることを再認識した。高齢者間のネガティブサポートに留意し活動を推進・評価する必要があろう。

E. 結論

ボランティアの感想の質的評価から「REPRINTS」により「社会的役割」と「知的能動性」が維持・向上できる可能性が示唆された。一方では、グループ活動の運営には課題が多く、高齢者間のネガティブサポートに留意し活動を推進・評価する必要があろう。

[参考文献]

１）川喜田二郎．発想法．東京：中央公論社（中公新書136），1967.

２）松田晋哉、筒井由香、高島洋子：地域高齢者の生きがい形成に関連する要因の重要度の分析．日本公衆衛生雑誌、45(8),704-712,1998

２）鈴木由美、岡崎史子、小林淳子、鈴木修治：仙台市Ｔ地区高齢者の健康づくりのためのインタビュー調査．日本公衆衛生雑誌、51(1),13-19,2004

３）橋本修二、青木利恵、玉腰暁子、柴崎智美,永井正規他：高齢者における社会活動状況の指標の開発．日本公

衆衛生雑誌、44(10),760-768,1997
4）竹綱誠一郎、鎌原雅彦、沢崎俊之：自己効力に関する研究の動向と問題．教育心理学研究、36,172-184,1988
5）Yokokawa Y, Kai I. Influence of self efficacy for health promotion on functional decline of elderly living in a rural community in Japan. Nippon Koshu Eisei Zasshi. 2004 Nov;51(11):945-50.
6) Wilson RS, Bennett DA, Bienias JL, et al.：Cognitive activity and cognitive decline in a biracial community population. Neurology. 2003 Sep 23;61(6):812-6.
7) Fujiwara Y, Shinkai S, Watanabe S, et al. Longitudinal changes in higher-level functional capacity of an older population living in a Japanese urban community. Arch Gerontol Geriatr 2003; 36: 141-153.
8) Fujiwara, Y., Shinkai, S., Kumagai, S., et al. Changes in higher-level functional capacity in Japanese urban and rural community older populations: 6 year prospective study. Geriatr. Gerontol. Int 2003; 3: 63-68.

F.研究発表

1．論文発表　　なし

2．学会発表

藤原佳典，西真理子，渡辺直紀，他．都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS“ —1.デザインと評価—．日本老年社会科学会第47回大会，東京，2005．6．15-17（発表予定）．

井上かず子，藤原佳典，西真理子，他．都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム“REPRINTS“ —3. ＫＪ法による活動の質的評価—．日本老年社会科学会第47回大会，東京，2005．6．15-17（発表予定）．

G.知的所有権の取得状況　　なし

[研究協力者]

渡辺直紀，西真理子，吉田裕人，井上かず子，大場宏美，天野秀紀，熊谷修．（東京都老人総合研究所・地域保健研究ｸﾞﾙｰﾌﾟ）

武田順子/富澤美奈子/峰由貴/越山晴夫（川崎市多摩区役所保健福祉ｾﾝﾀｰ）

厚生労働科学研究費補助金（長寿科学総合研究事業）
分担研究報告書

都市部高齢者の世代間交流型社会貢献プログラム "REPRINTS"
― 5．健康づくり計画の推進に与える影響に関する研究 ―

分担研究者　角野　文彦　　滋賀県湖北地域振興局健康福祉部長（長浜保健所長）

ヘルスプロモーションの実践のための展開モデルといわれるMIDORIモデルにシニア読み聞かせボランティア事業「REPRINTS」と健康日本２１・地方計画「健康ながはま２１」の評価指標を当てはめ、事業の計画・推進に与える影響について検証した。MIDORIモデルに従い、第１段階から第９段階まで診断・評価した結果、第１段階から第５段階の診断と第６段階の実施については問題ないことがわかったが、第７段階の経過評価においては、児童や教師、保護者の読み聞かせの受け手への介入が少なかったこと、高いランニングコストがあること、コーディネーターの人的資源が少ないこと、高齢者の読み聞かせ技術の向上が必要であることなどの検討課題があった。また、第９段階の結果評価においては、健康指標を動かすだけの参加者やグループ数に至っていないため事業の計画・推進に与える影響がまだ薄いことがわかった。今後事業を展開する上で、参加者数やグループ数を増やす工夫が必要であるが、それには一担当課だけで事業展開をすることは不可能であるため、組織的に取り組む体制を取ることが大切である。経過評価で明らかになった検討課題には、解決しにくいものもある。しかし、ヘルスプロモーションの柱である「健康を支援する環境づくり」を推進しようとするのであるならば、行政は解決しにくいものに対しても果敢に取り組む姿勢が重要である。本事業は緒についたばかりであるが、今後の展開によって「まちづくり」にまで発展するか否かが決定されていくであろう。

A．背景と目的

平成16年1月に長浜市の健康日本２１の地方計画である「健康ながはま21」が完成し、平成16年度を初年度に、新たな健康づ

くりが計画的に推進されることとなった。

「健康ながはま21」は、食生活、身体活動・運動、喫煙、飲酒、心・休養、歯科、健康管理・病気の管理、認知症対策の8つの分野から成り立ち、それぞれ8つの大目標と22の具体的目標、27の評価指標を掲げている。その目標や評価指標は、全年代を4つの世代に区分しデルファイ法により課題を検討した中から抽出された経過があり、特に高齢期世代の課題に老化による身体機能の低下と認知症対策が上位にあがっており、早急な取り組みが必要との意向であった。

高齢期の身体機能低下については、身体活動・運動分野において大目標として「なかまと楽しく身体を動かす」、具体的目標として「運動しやすい環境をつくる」、評価指標として「1日1回以上（ほぼ毎日）外出する高齢者の割合」を上げることとした。

また、心・休養分野において大目標として「心豊かに自分らしい生活をする」、具体的目標として「高齢者が喜びを持って活動することができる」「子どもの成長を周囲が支援していく」、評価指標として、「子育てボランティア（託児、見守り党）の人数」、高齢者の「ボランティア等、何らかの社会活動をしている人の割合」を上げることとした。認知症対策については、認知症対策分野において大目標として「認知症を予防する」、具体的目標として「認知症について正しく理解する」「認知症の予防に努める」、評価指標として「早期相談者を増加させる」、高齢者の「ボランティア等、何らかの社会活動をしている人の割合を上げる」こととし、高齢期世代の課題の解決に取り組む体制を整えた。心・休養分野の評価指標と認知症対策分野の評価指標が一部分同じ（評価指標）であるのは、できるだけ能動的な知的活動を推奨することで認知症の発症を遅延し[1)]、ひいては手段的自立（IADL）が長く維持されること[2,3)]を期待しているためで、一方、社会活動を推進することにより心・休養分野における「生きがい」の保持につながると考えたからである。

こうした背景をもとに、「REPRINTS・ながはま」（シニア読みきかせボランティア事業）が、身体活動・運動、心・休養、痴呆対策の各分野にまたがる事業として開始された。本事業は、高齢者が生き生きと活動することで、本人ならびに周囲に心身面でどのような影響がもたらされるのかを科学的に証明するモデル研究事業である。従来の筋トレや脳リハのような身体の一部分をターゲットに、「一部分が健康になる」ことを目標にした「医療モデル」型研究ではない。生活全般をアクティベートすることにより心身の廃用障害を予防するもので「生活モデル」型研究と言える。地域住民の生活全般への介入を要するという理

由から、計画推進にあたって行政的にどのような効果があったのかについても評価する必要があると考える。

従って、本研究ではヘルスプロモーションの実践のための展開モデルと言われるMIDORIモデルに当てはめ検証することとした。

本研究の目的は、「REPRINTS・ながはま」が、ヘルスプロモーションに基づく健康づくり計画の推進にどのような影響を及ぼしたのかをMIDORIモデルを用いて明確にすることで、今後の事業展開や計画推進の資料とすることである。

B．研究方法

長浜市における「REPRINTS・ながはま」がこれまで推進されてきた全プロセスをMIDORIモデルに当てはめ、地域保健活動としての評価を行うこととする。

【「REPRINTS・ながはま」の経過】

① 平成16年2月：教育長、教育委員会学校教育課、生涯学習課、高齢者介護福祉課に対して事業説明を行う

② 平成16年3月：市内6小学校を回り学校の「読み聞かせ」、その他のボランティア活動の状況についてヒアリング調査実施

③ 平成16年4月より、広報「ながはま」において「知って欲しい認知症のこと」と題して2ヶ月に1回の啓発連載開始

④ 老人会への出前講座には認知症関連内容で出向き、事業PRする

⑤ 平成16年7月13日：「REPRINTS・ながはま」を「高齢者の元気づくり学校ボランティア事業」と名づけ、その説明会および講演会を実施。参加者数54人（うち本事業への参加申し込み18人）

⑥ 平成16年7月23日：ボランティア（介入群）および健康モニター（対照群）の健康チェックを実施した（参加者数38人）

⑦ コーディネーターの公募：健康推進員等を含む応募者（5人）

⑧ 平成16年7月30日～9月10日：読み聞かせボランティアセミナー（全8回）の開催

⑨ 平成16年8月：読み聞かせボランティア受け入れ小学校とボランティア・グループの決定　長浜小学校（6名）、神照小学校（6名）、南郷里小学校（5名）

⑩ 各受け入れ小学校の保護者ボランティアとの調整

⑪ 平成16年9月：読み聞かせデビュー

⑫ 年末～新年：活動が軌道に乗りマスコミを活用したPR活動

⑬ 高齢者保健福祉対策委員会（「ゴー

ルドプランながはま２１」策定委員会）での介護予防としての効果についてのPR

⑭ 認知症予防講演会において事業PRとボランティア参加者による活動効果の発表

⑮ 留守家庭児童会の児童、保護者、指導員に対するアンケート調査の実施

【MIDORIモデルへの当てはめ】(図1,2)

C．結果

第1段階　社会診断

ヘルスプロモーションでは健康は生きる目的ではなく毎日の生活の資源と謳われているため、事業の地域保健活動の最終目標にはQOLが当てはめられる。「健康ながはま21」はヘルスプロモーション理論で構築されているため、QOLにはターゲット分野の大目標を入れることとする。この目標抽出においては、計画策定において十分な議論がなされている。また、高齢者サイドと学校等の受け手サイドでは大目標が違うため、2つのモデルを作成することとなった。

第2段階　疫学診断

疫学診断では介入対象となる健康問題や健康上の目標を決定するが、具体的には前記のQOLを達成する指標を入れる。これは計画書には明記されていないが、現状把握として収集したデータや今後健診などにより収集されるデータを利用し当てはめる。達成に要する期間は計画期間を入れ、どの程度になるかは改めて議論の必要なところである。

高齢者サイドでは介護予防の観点から介護保険の利用についての数値の変動や実際の身体活動や認知機能の維持の状況が当てはめられると考える。また、受け手サイドでは教職員の負担の度合いや子どもの国語力の向上、高齢者に対する尊敬や親しみの度合いが当てはめられる。

第3段階　行動・環境診断

疫学診断で選ばれた指標の行動因子や環境因子を分析し、行動目標と環境目標を設定する。ここでは、変容して欲しい生活習慣や行動、介入により変更可能な環境は何かを見つけることが必要で、特に変わって欲しい生活習慣や行動には、計画の具体的目標の評価指標を当てはめた。

高齢者サイドの行動においては外出程度やグループ活動の回数、絵本や読み聞かせに関する学習・活動記録の枚数、健康の自己管理状況、子どもへの関わりをあげ、環境においては読み聞かせ環境（グループ活動ができる場所、周囲の受け入れ状況）をあげた。受け手（児童）

サイドの行動においては読書への興味の度合い、高齢者との交流をあげ、環境においては読み聞かせを聞く場所、交流時間、周囲の反応が挙げられた。

第4段階　教育・組織診断

行動因子や環境因子に影響を与える要因を準備因子、強化因子、実現因子に分類して検討する。準備因子は主に動機づけであり、強化因子は行動による周囲からのフィードバックであり、また実現因子は行動変容や環境変化を可能にする技能や資源のことである。準備因子や実現因子は健康教育によって達成されるため、シニアの読み聞かせ事業による介入が直接影響を与える部分である。

高齢者サイドでは、準備因子として介護予防の知識が必要であること、強化因子として楽しいこと、身体に変化が現われること、周囲の見方が変わること、実現因子として技術があることや、技術指導が受けられること、ある程度の健康状態が保てることが挙げられた。

受け手側サイドでは、準備因子として周囲の大人が高齢者との交流が子どもに良い影響を与えることを知識としてもっていることが必要であることが挙げられた。また、強化因子として。子どもが楽しかった思いを持つことや家族や教職員が喜ぶこと、知り合いが増えて地域での見守りにおける安心感が増すことがあげられた。

第5段階　運営・政策診断

第4段階までの目標を達成するために必要な事業の運営について判断する。組織や資源、実行上の障害を査定するところで、具体的には「REPRINTS・ながはま」における介入企画が運営診断に入る。また、政策診断は組織や方針について検討することである。現時点では「健康ながはま21」の実行そのものが長浜市の方針であるため、その達成のための介入について協力を求めることは利害がぶつからない限り支障ないと判断した。

第6段階　実施

上記の5つの診断をもとに介入を実施する。介入は前に記述した長浜市のシニア読み聞かせボランティア事業過程により実施した。

第7段階　経過評価

介入経過に関する情報をもとに企画の遂行やコスト、マンパワー、関係者の反応の確認をする。

事業の遂行については、概ね順調に進行したと考えられる。しかし、事業効果を測るための児童や保護者、教職員へのアンケートについては、アンケート内容

や目的について学校の同意が得られず、留守家庭児童会での実施となった。事業全体に対する関係者の理解は概ね良好であったが、細部に関して学校が保護者等の矢面に立つようなものに関しては実行できなかった。また、保護者への事業実施のアピールも少なかったせいで、知っている保護者は子どもを通じての理解だけに留まった。事業の本質についてどれだけの保護者に知られているのかは疑問である。

事業コストに関しては、読み聞かせの実行についてはコーディネーターの報償以外ほとんどコストはかからない。しかし、事業効果を測るための健康チェックや事業効果を高めるための技術指導に関しては専門家を必要とする部分であるために高いランニングコストがかかる。特に認知機能を測定する際には、比較的簡便な認知症のスクリーニングの場合とは異なり、健常高齢者における変化をみる場合には訓練を受けた心理職が必要であり、現時点では東京都老人総合研究所の協力を得なければ実施できない状況である。事業効果の測定を継続的な事業展開の中に組み込むためには、地元でできる簡便な測定方法を導入しランニングコストの低減を図る必要がある。

マンパワーに関しては、大量のスタッフが必要である健康チェックについては、臨時にアルバイトを割り当て実施した。日常的には３つの小学校を中心にグループづくりを行ったので、１グループに１人の行政職員と２人のコーディネーターでチームを組んだ。しかしコーディネーターが１名見つからなかったため１つの小学校が２名のチームとなり、グループ内のトラブル等が起こった時に他のグループから応援を頼むことがあった。１グループ３人の従事者は、今回最低でも必要な人数と考える。グループワークに慣れないことやボランティアとスタッフの人間関係がうまくとれなかった場合に代替できる環境が必要であった。今後、軌道に乗れば従事者数を減らすことはできるだろう。

関係者の反応としては、参加者については、グループ活動が進むにつれボランティア間の仲間意識が強くなった。脱落者は数人いたが、いずれも初期の段階で、グループ間の人間関係にうまく適応できなかったことや事業の主旨が理解できていなかったためと考えられた。技術についても積極的に学習しており、児童の名前を覚えるなど児童との交流にも慣れてきている。スタッフにおいては、コーディネーターがボランティア間の調整がうまくできずに悩んだこともあったが、概ね高齢者の考え方や行動から感動や感銘を受け、今までの高齢者像が激変したと

の意見が多かった。教職員についても、同様にポジティブな意見が多数聞かれた。児童の反応は、顔見知りができたことから、学校内や通学・帰宅途中で出会った参加者に声をかけることが多くなった。しかし、シニアの読み聞かせに退屈する児童もおり、保護者にそれを訴えている児童もいたようであり、絵本選びや読み方における技術の向上が課題である。

他機関との関係では、推進会議や説明会議を持ちながら事業実施を図っていった。特に推進会議の議長である教育委員会とは、効果測定のためのアンケートについて学校の反対に遭った時に、保健センター保健師ともに説得を続けるといったエピソードから、密接な関係を築けたのではないかと考える。またアンケート実施の際に、留守家庭児童会の指導員や所管の青少年センターとの協力関係が構築できたことも本研究の成果の一つと言える。

当、湖北地域振興局（長浜保健所）の直接的な役割は、ボランティア・プログラムの進行や保健機関以外の関係機関との調整の相談役や推進会議においては「健康ながはま２１」の中での事業の位置づけを説明する役回りを果たし、機関間のコーディネートを行った。

第8段階　影響評価

準備・強化・実現の各因子および行動因子や環境因子に介入がどのような影響を及ぼしたかについて検討した。

準備因子に関して、ボランティアは認知症予防講演会や読み聞かせセミナー、全体会などで認知症の予防に関する知識を繰り返し得られたため、周囲の人に「REPRINTS」の活動が認知機能の維持や健康に良い活動であることを啓発しており、高齢者サイドの準備因子の目標は達成できたと考える。受け手サイドの準備因子に関しては、介入が不十分で、教職員や保護者全員に高齢者との交流効果や読み聞かせの効果について未だ説明できていないことが今後の課題である。

強化因子に関しては、高齢者サイドでは学校から児童の感想文をもらうことやボランティアとの会食、新聞やTVでの紹介等を経験していることからか、読み聞かせやグループ活動への欠席者が少なく目標は達成されたと考える。受け手サイドでは、児童が無理に聞かせられ、感想文を書かされていることも考えられるため、児童や教職員の感想を聞く方法の検討が必要と考え、目標達成状況が不明である。

実現因子に関しては、高齢者サイドに関してはセミナーによる読み聞かせの技術指導を基礎に、各自で工夫して読み聞かせ技術を習得している。しかし、前述